

大切な存在

青森県つがる市立木造中学校

三年 工藤 野乃香

「そんなの分かってるよ、うるさいなあ！」私は最近、親とケンカをすることが多くなった。なぜかは分からないが、おそらく受験生になったことも原因だと思う。定期テスト、実力テスト、毎日テスト勉強に追われ、終わっても次のテスト、またその次と何度も何度もやってくる。

そんな日が続く中、私はどの高校に行くのか悩み、毎日頭をかかえていた。将来就きたい職業も夢もない私は、早く決めなきゃ、どうしようどうしよう、日がたつほどに焦りと不安がつり、プレッシャーとも戦う日々だった。

「おかえり。」

家に帰ると父は、私の「ただいま」よりも先にその言葉をかけてくれる。テレビを見ていても、何か別の作業をしても、必ず私の目を見て、顔色や表情、声のトーンなど全てに注目する。そして父は

「どした？ 部活疲れたの？ 元気ないね。」

「お、なんか元気そうだね。テスト良い感じだったの？」

と言う。そうやって気を遣ってくれるのは嬉しい。すごく嬉しい。しかし私は時々、それを鬱陶しく思うことがある。

ある日、私は父と勉強法について少し激しいケンカをした。効率が悪い、もつと別の方法がある。そう言われた。私は一年生の頃からずっと同じように自己流で勉強してきた。それを否定されているように感じ、正直腹が立った。それが私のことを想い、父なりに考えてくれた上でのアドバイスだということとは知っていたはずだが、私は反論した。

「別に良いじゃん。自分の好きなように勝手にやらせてよ。」

久しぶりに父に意見したような気がする。

その後、父とケンカをしたまま自分の部屋へ行つた。もう一度、父との会話を思い返し、私は視界をにじませた。

気を遣ってかけてくれた、あたたかい言葉に怒鳴り部屋に響いた私の声、部屋を出た瞬間の父の悲しそうな背中。今でも忘れられない、鮮明に頭の中に残っている。

しばらくして、私は何度も謝りに行こうと思ったが、思うだけで体が動かない。後悔しているのに、謝りたいのに……。気まずくて父のもとへと行くことができなかった。

時間が経ち、夜になり、父が寝る頃になった。すると突然部屋の扉が開いた。

「の、おやすみ。早く寝るんだよ。」

いつもの父が、優しい笑顔の父がそこにいた。

「うん、おやすみ。」

私もいつも通りに返事をした。

もう気にしてないのか？ また私に気を遣ってくれているのか？ いろいろなことを考えた。

おそらく父は私が怒鳴ったことを後悔し、落ち込んでいること、受験や将来について悩んでいること、全てがお見通しで、そんな私への最適な対応を考えて私のもとへ来てくれたのだろう。

ある日、私は軽い気持ちで、普段している何気ない会話の話題を挙げるように

「たぶん、お父さんが私を好きって思う気持ちより、私がお父さんを好きって思う気持ちの方が大きいよ。」

と言った。すると父はムクツと起き上がり、大きな声で

「いや、それはない。お父さんの方が大好きだ。それは絶対負けない自信がある！」

ものすごくキツパリとした顔だった。

「それはお母さんも同じ。親は子供のことすごく大事に思ってるんだよ。」

母は普段あまり私をかわいがったり、好きだと言ったりしないが、今日は珍しくそんなことを言うので胸がとてもジンジンした。

父も母も熱くなって反論してきたため、素直に負けを認め、ひしひしと二人の愛を感じていた。

つらくて、いろいろなことから逃げだしてしまいたくなって、どうしようもなくなった時、一番に気付けてくれて、そばにいてくれるのは父と母だ。

一人っ子の私は、幼い頃から二人に愛され支えられ、大切に育てられてきた。

時には、甘やかしすぎじゃないかと周りの人にかかわれることもある。しかし、私も父も母もそういったことを恥ずかしいと思うことはないし、人にはそれぞれの生き方があると思う、幸せに暮らしている。

私の元気の源は父と母である。胸を張って言えること、それは世界一と言っていいほど親に愛されている幸せな娘であるということ。

親への感謝を忘れず、親のためにも、どんな困難にも立ち向かい、頑張ろうと思う。